

に更に先行し先在する万有の P.C./P.C. である D.p.c. が媒介し所謂神変加持する、と認めるのである。(四)基督教の根本教義「原罪」なるものが実在すると仮定する。すると、当の現実態への可能態(以下、仮称原罪への可能性(P.O.S.))が先在しよう。すると無からの創造の際、D₂の全善神性において終始全知の対象としてある当の P.O.S. は、いずれかのプロセス・仕方において、「父なる神」に「よし」と裁可されて、現実態を附与されよう。そしてその是認裁可のとき、全善の神性意志(g)は是認される非善の P.O.S. (〜g)は、「善」(g)なるものとして神性意志に一致し、是認する全善意志において全善意志としてあり、非善の P.O.S. (〜g)≡全善(g)であろう。しかし乍ら D₂は創造の折、全被造世界を「凡て善し」と是認する故、非善Ⅲ全善となれば、天地の両世界が善Ⅲ非善となり、無原罪の神人(g)による救世物語も無記・無意味となる。かくして c.n. においては、仮称原罪への可能性は、前記 imm. と同様、三神とその神性全存在への第二の他性として外在し、故に c.n. は成り立ち得ず、そして D₂の c.n. と P.O.S. は、基底から D.p.c. が神変加持する、と認めるのである。

尚表題の後半の適用で扱うのは(ア)IAHR 2005 の『要旨集』での高名な奥村一郎神父の公言(「仏道をならふ」についての道元の「自己を忘る、」よりも、イエスの「自分を捨てて私に従え」の方が「更に鋭い」)。(イ)滝沢神学の所説(世界と人間の自己が「第一義(に)接触」し其者と「不可逆不可同不可分」なのは三一神だ)。(ウ)エックハルトの「信仰」の言明(三一の「父」の最重要性質は「第一の原因」たることだ)。いず

れも念頭に D.p.c. が皆無で、自然理性上、誤りであろう訳を説述する。

現代思想の宗教回帰

——スラヴォイ・ジジエクの議論を中心として——

加藤 喜之

ジョン・カプートが唱えるように、宗教回帰が宗教者や神学者ではなく、哲学者や批評家によって唱えられているのが、現代の様相である。しかし、これは、単純に、プレモダン・反啓蒙的な宗教に回帰するというのではない。ジョルジョ・アガンベンやアラン・バディウと並んで、「ポストモダン」や「デイクンストラクシヨニズム」の超克を試みる思想的動きを牽引する、ラカン派ヘゲリアンであるスラヴォイ・ジジエクの著作には、宗教、特にキリスト教についての言及が多くみられる。絶え間なく繰り広げられる映画批評、文学批評、ジョーク、時事批評によって、明らかにされると同時にあいまいになるジジエクの思想を、キリスト教理解に軸をおいて理解していくことが本発表の目的である。

カント以前の啓蒙的理性は、矛盾を超越する神／原理の存在を肯定する。カント自身はこの問い立てが、人間理性の根本的な不可能性と限界を表すものであり、問いはアポリアになるのみであると論じている。ジジエクは、カントのアポリアをラディカルに理解し、高次の調和原理を否定し、否定そして矛盾と

いう「絶対」を見出したヘーゲルに追従している。この「否定」がキリスト教の核心、つまりキリストの死の内に見出される。

律法の遵守と施行を目的とするユダヤ教には、すでに「神の死」をみることができるとジジェクは論じる。しかし、律法を可能にする、見えざる存在としての超越神の影は、ユダヤ教に残りつづける。『ヨブ記』では、この「見えざる存在」の不可能性が暴かれるが、それでもヨブは、サンタクローズの真実を知った上で、あえて、親のために信じ続ける子供のように、神を信じ続ける。一方、キリスト教は、この不能な神の事実を、十字架の上から公にする啓示宗教だとジジェクは語る。

シェリングやヘーゲルが、カント以前の超越論的形而上学から、フォイエルバッハ、マルクスへとつながっていく唯物論への道標となったように、「消え行く介在者」としてのキリストの死は、超越神や「大文字の他者」の否定を、例えば、ユダヤ教のように、共同体の主体的意識に依存させない「なにか」を加える。この「なにか」とは、さまざまな超越論を要請する原因である、人間の生の剰余 (the excess) の否定である。ジジェクによれば、人間を人間足らしめるもの、それがこの人間の生の本源的な剰余としての、「欲動」であるという。他の一切の動物には欠乏を充足させようとする欲求としての「欲望」(desire) は存在するが、「欲動」(drive) は存在しない。欲動とは、象徴界が去勢によって主体を被う過程において、言語化されない「レアル」を求めようとする衝動である。

欲動のもともめる物自体とは、剰余 (the excess) すなわち、動物的な生では満たすことのできないジューサンスである。し

かし、これは、象徴界を排除して手に入れることができるような神秘宗教的な法悦ではなく、言語を操る人間が創出し続ける象徴界に「ひずみ」として存在しているものである。換言すると、動物から区別される人間存在には(そして、言語を使う限りにおいて)、不可能なジューサンス・物自体を想定して、それをもとめつづける欲動が備わっている。獲得不可能なジューサンス、剰余を作り出した人間の象徴界というシステムは、超越的な神を創出するシステムでもある。獲得不可能なジューサンスをもとめて、そのジューサンスの獲得を擬似的に可能にする「あちら側」を設定する。ゆえに、ジジェクは、キリストの死を、人間の本源的な「あちら側」への欲動を引き受けたものとして理解している。